校長室だより

令和６年度
５月１３日
ＮＯ．９

お話の世界に浸り、心動かす「読み聞かせ」

今年から始まった読み聞かせボランティア「さえずり」さんの読み聞かせを、どの子も穴が開くほど真剣に見つめます。一，二年の教室からは、笑顔があふれ楽しいつぶやきがこぼれます。三，四年生は、お話の世界に引き込まれていきます。五，六年生は、お話の展開に頭と心を揺り動かされます。

日本での読み聞かせは、第二次大戦後、全国各地に広がりました。言葉を通して読み手との絆を深め、心を動かして行動につなげる力があるされる読み聞かせは、乳幼児の情操教育や読書活動への導入として今も多く認められています。脳科学の研究でも、精神安定作用があることが発見され、意欲の向上、脳のリラックス効果なども明らかになっています。基本的に子供たちは無条件に読み聞かせが好きです。授業中よそ見をしている子も、集中して話を聞く姿が、読み聞かせでは見られます。

読み聞かせの中で、子供たちは話を聞きながら、絵を見ながら、話の内容や次の展開、登場人物や情景について、想像を巡らせます。下学年では、大人も気付かない小さなものを挿絵から見つけることがあります。高学年は、話を聞きながら行間を読んだり、また自分の世界に入ってしまったりする子もいます。毎朝読み聞かせを行っている学校では、こうした言葉のシャワーを毎日浴びることで、高い国語力が得られるとも聞きます。

反面、日本の読書量は世界最低レベルだと言われます。二〇一八年の学習到達度調査（ＰＩＳＡ）によると一五歳の読む文章量は七十六か国地域中七十四位、またベネッセ教育総合研究所の調査結果（二二年）によると一日〇分の不読者率は、小学校一年生でも十五・三％に達すると言います。

子供たちにとって、こうして本に触れる体験は、とても大事なことです。楽しく心動かせる時間になればと考えます。

◇５月８日に読み聞かせしてもらった本◇
低学年：「かっぱ・かぞえうた」（せがわやすお著/福音館）、「ｳﾗﾊﾟﾝ・ｵｺｻ」（谷川晃一著/童心社）
「どうぶつ まぜこぜ あそび」（ｻﾄｼﾝ/そうえん社）、「ばけばけばけばけ ばけたくん」（岩田明子著/大日本図書）
「もったいない ばあさん」（真珠まりこ著/講談社）、
中学年：「いいから いいから３」（長谷川義史著/絵本館）、「ねこのさら」（川端 誠著/ﾛｸﾘﾝ社）、
高学年：「まんじゅうこわい」（川端 誠著/ｸﾚﾖﾝﾊｳｽ）、「じゃない！」（ﾁｮｰﾋｶﾙ著/ﾌﾚｰﾍﾞﾙ館）